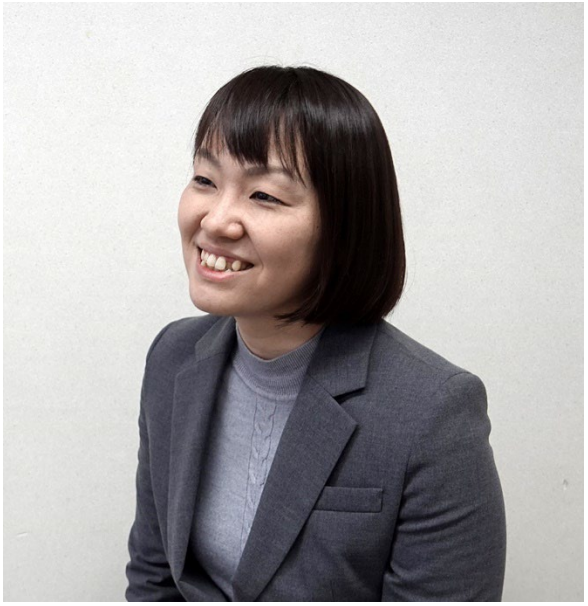
「助けたい」と言うより「一緒に生きていたい」・・・
どこにいても、目の前の人たちの本当の笑顔を追い求めていたいと思う看護師。

NCGM

きくち　しきの
菊池 識乃

国際医療協力局
人材開発部 研修課
看護師



★略　歴

2008　国立国際医療センター戸山病院（現・国立国際医療研究センター　病院）整形外科病棟入職
2013　国立国際医療研究センター 病院 生活習慣病内科病棟 異動
2016　青年海外協力隊 看護師 カンボジア王国 派遣
2018　国立国際医療研究センター 整形外科病棟 復職
2019　国際医療協力局 入局

★現在の主な担当業務

・ JICA草の根技術協力事業 カンボジア「女性のヘルスプロモーションを通じた 包括的子宮頸がんサービスの質の改善プロジェクト」健康教育担当
・令和2年度医療技術等国際展開推進事業「モンゴル国における看護専門職による継続教育としての新人看護師教育に関する事業」
・研修課、広報情報課、ライフコースヘルスチーム

菊池さんが、看護師、国際保健医療協力を目指したきっかけを教えて下さい。

幼い頃から「看護師」になりたいと思っていました。その理由は自分でもわからないのですが、気づいた時にはそう思っていました。おそらく、子どもが抱く漠然とした憧れだったのだと思います。
小学校高学年頃に外国、特に開発途上国など呼ばれる国々の状況を知り、看護師になりたいという気持ちを強くしました。生まれた所が少し違っただけで、子どもでも戦場に行かなければいけなかったり、遊んでいて地雷の被害に遭うような環境の中で生きていかなければいけない世界があることに、衝撃と何とも言えない不甲斐なさのようなものを感じました。そして、いつか世界が平和になり、みんなで協力して生きていけるようになることを願い、自分もその中で何かできることをしながら一緒に生きていたいと思うようになりました。
今思い返すと、子どものころの無駄に強い正義感みたいなものだったのかなぁと思いますが、その時の気持ちは、「助けたい」と言うより「一緒に生きていたい」と言う方が自分の中ですごく腑に落ちたのを覚えています。

国際保健医療協力への思いは、ずっと持ち続けていたんですか。

看護師になる前もなってからも、ずっと国際保健医療協力の分野に興味があり、いつかは海外で働きたいと思っていました。臨床経験を重ねながら、国際保健医療協力についても学べると思い、国立国際医療研究センター（NCGM）へ就職しました。当時は私の中に「3年で一区切り」のようなイメージがあったのですが、3年目のときにまだ1人前ではない「日本で看護師をしていた」と自信をもって言い切れず、この状態の私が海外に出ても邪魔になるだけだと思いました。その時は、まず5年目まで続けてもっと経験を積もう、国際保健医療に関しても勉強しようと思っていました。

休暇を利用してスタディーツアーなどに参加

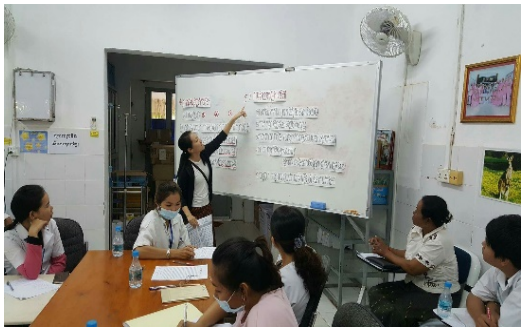
その後、さらに5年と合計8年間の臨床経験を重ねることになるのですが、その間に副看護師長になり、これまでにない責任を感じながら病棟運営や後輩育成に関わるようになりました。さらに当時の病棟師長さんに影響を受けて、病棟管理の面白さも少しずつ感じられるようになっていました。

しかし、心の中には、常に国際保健医療協力の現場で働きたいという思いがあって、そう思いながら日々患者様に関わること、周りのスタッフ（特に後輩）に指導したりしていくことが、何だかすごく誠実でないような気がしていました。子どものころからの夢と臨床の楽しさの間で葛藤が生じるようになり、そろそろ夢への挑戦に最初の一歩を踏み出すときかもしれないと思い、少しずつ動き出しました。

そして、青年海外協力隊に参加することになるんですね。青年海外協力隊での活動や生活について教えてください。

東南アジアのインドシナ半島南部に位置するカンボジア、首都プノンペンから南に約80㎞の所にあるタケオ州が私の任地でした。赴任当時いた隊員の中では一番田舎の州なのではないかと言われていました。
私は、タケオ州立病院の看護部に所属し、「５S-KAIZEN活動の導入や感染制御管理チームの活動強化、看護過程等の看護師対象研修」をカウンターパートの病院スタッフとともに実施しました。５S-KAIZEN活動では、日々少しずつ整っていく病棟環境に驚かされ自分たちの活動を見せてくれる病院スタッフの笑顔に何度もパワーをもらいました。また、院内でだけでなく、多くの病院スタッフが家で採れたマンゴーやバナナ、カンボジア料理を届けてくれたり、お家に呼んでくれたり、家族で出かけるときに一緒に連れて行ってくれたりと、多くの人の優しさや温かさ、笑顔に支えられました。
正直なところ、活動に迷ったり、本当に自分のやっていることが病院のため、病院スタッフのためになっているのかと悩みながら過ごしている時間の方が多かったように思いますが、カンボジアの文化に触れ、のんびりとした空気に癒され、たくさんの友人もでき、タケオが私の第２の故郷になりました。

タケオ州の街並み



研修中の様子

お寺にて

「山上の寺院」プノンチソー（タケオ州にある遺跡）

手長エビ（タケオ州の名物）

青年海外協力隊の後は、どうされたんですか。国際医療協力局に直接入局したんですか。

協力隊には現職参加していましたので、帰国後は、看護師としてNCGMセンター病院に復帰しました。新人の頃から５年間お世話になった病棟でしたので、懐かしさと、新たな出発を切るという思いが強かったように思います。もちろん、勘を取り戻すのには多少時間がかかりました。

少し慣れてきた頃、協力隊に行く前と同じ地点に戻ってしまったという感覚に襲われました。臨床は好きで楽しいと思うのですが、今もなお、私の心の中に、国際保健医療協力の現場で働きたいという思いが強いことを自覚しました。それと同時に、協力隊での活動中も感じていたことですが、私の看護観と開発途上国と言われている国で活動しているときの想いに、ひとつ大きな共通点があることに気づきました。それが「目の前にいる人たちの本当の笑顔」を追い求めることでした。今が良ければよいのではなく、将来的に総合的にみて、必要なことは何なのか、その人が幸せ（笑顔）になれるにはどうしたら良いのかを考えることでした。
また、人の持つ可能性に強い魅力を感じるのも、共通点かもしれないと思っています。
そして、そんな私の気持ちを知ってか知らずか、私にとっては、とても恵まれたタイミングで国際医療協力局へ異動となりました。

今後、国際医療協力局で、どのような仕事をしていきたいですか。

まだ具体的ではありませんが、国際保健医療協力を志した一番古い記憶にある「一緒に生きていきたい」という気持ちを忘れず、「目の前にいる人たちの本当の笑顔」を真摯に追い続けられたらと思っています。そのために、今経験させてもらっていること、学ばせてもらっていることを大切にし、しっかり実力に変換できるよう努力し続けたいと思います。

最後に、これから国際医療協力の世界を目指そうとしている人にメッセージをお願いします。

何かを始めるのに、遅すぎることも早すぎることもないのではないかと思っています。自分自身が「今だ！」と思うときがその人にとっての、始めてみるタイミングなのではないでしょうか。
結果が上手くいくか、失敗するかは別の問題として。もし失敗したとしても、その時に失敗したことにも、何らかの意義があるんだと思います。
ここにも一人、同じように国際保健医療協力の現場で、少しでも誰かの何かの役に立てればと、日々悩んだり落ち込んだり、たまにちょっと喜んだりしながら、一歩ずつ（半歩ずつ!?）進んでいこうとしている人もいますので。
国際保健医療協力に限りませんが、せっかく「やりたい！」と思ったなら、その気持ちを大切に、一歩ずつ進んでいってください。

ありがとうございました。